



レーザー学会創立30周年を迎えて

山中 千代衛*

At the 30th Anniversary of Laser Society

Chiyoë YAMANAKA*

20世紀の物理学の進歩が結実した最も貴重な成果の一つがレーザーである。昨年他界した旧ソ連のプロコロフ、パゾフと米国のタウンズが1964年レーザーの発明でノーベル賞を受賞した。この内容はメーマンによるレーザーの実現につながった。第二次世界大戦中のレーダーの研究が物理学と大出力発振技術を結びつけたことに源をもつレーザーの発見は科学史上興味深い事件である。レーザー現象は、超伝導や超流動とともにプランクの定数がミクロの世界からマクロの世界にのさばり出た量子効果である。

1970年には大阪万博が千里丘陵で催され、わが国は戦後最も活気に満ちた成長期を迎えた。時あたかも量子エレクトロニクス国際会議が京都で開催され、わが国のレーザー研究も広く世界に認められ成功の端緒が開かれた。1972年には大阪大学工学部にレーザー工学研究施設が他に先駆けて開設され、以来レーザー研究のCOEとして活躍している。またレーザー核融合の原点となった日米セミナー「レーザーと物質の相互作用」が同年京都で開催され国際協力の道が開かれ、レーザー技術は新しい技術確信の担い手として、計測、情報処理、物質プロセス、エネルギー開発など広い分野で急速にその重要性が認知されてきた。

当時わが国でも各大学、メーカーに散在するレーザー研究者は相当数にのぼったが、欧米ではレーザー技術の研究開発に関し着々と研究体制を整備しつつある情勢に鑑み、わが国でもレーザー関係者の協力体制をつくり、総合的かつ広い基盤にわたって研究を推進することが要請され、関係者の熱意と産業界、学界の熱心な後援により1973年レーザー懇談会が結成された。初代の会長には遠赤外線の権威吉永弘教授が就任された。「レーザー研究」の創刊号を見るとこの頃のレーザーにかける人達の熱意がひしひしと伝わってくる。

70～80年代は日本国上げて右肩上がりのご時世で、会員の増強も著しいものがあり、1978年、誕生5年を経過して社団法人レーザー学会が成立した。この時筆者が会長に選出された。創立10周年の1983年には「レーザーハンドブック」が記念出版として刊行され、わが国で初めてレーザー技術の本格的な集大成がなされた。1988年電気学会創立百周年の記念行事があり、筆者はたまたま会長として記念式典に皇太子殿下御夫妻の御臨席を賜ったが、皇太子妃美智子様は1987年の日本賞の情景をよくご記憶でメーマンさんのルビー色のネクタイが美しくございましたと仰せになった。光技術大國日本が捧げる賞として誠にふさわしい一幕であった。

3代目の会長には難波進教授が就任され、レーザー学会も年次大会、レーザー技術普及セミナー、分科会、専門委員会を開催し、またレーザー研究業績賞、奨励賞を授与し、全国に支部を開設し、専門学会として隆々たる地位を占めるようになってきた。1992年わが国レーザーの生みの親霜田光一教授が会長にご出馬になり、1993年には盛大なレーザー学会創立20周年記念事業が展開された。「レーザー学会二十周年のあゆみ」にその全容を読みとることが出来る。記念出版として「先端レーザーテクノロジー」と「レーザー技術の新展開」が刊行され20年のレーザーの進歩が集約されている。学会の進展と共に事務局の整備充実が課題となったが、1996年三菱電機の岡久雄氏が会長に就任され、レーザー研究の編集出版システムをはじめ抜本的近代化がすすめられ、新時代に応える体制が出来上がった。またAPLSと称されるアジアパシフィックレーザー科学国際会議が発足し、国際協力の実が大いに上った。2001年から豊田浩一教授が会長に就任になり、30周年記念事業として「新版レーザーハンドブック」が企画されている。まさに時代が求める最適のテーマと考えられる。

今日のレーザー学会の繁栄と充実を目のあたりにするとき、かつての揺籃時代学会の実務に営々と尽力された方々、とくに久保宇市教授、廣井得輔氏の貢献には頭のさがるものがある。30周年を迎えるにあたり、一会員として厚く感謝するものである。21世紀は光の時代である。

* (財)レーザー技術総合研究所 (〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-6)

* Institute for Laser Technology, 2-6 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871